

日本語の再発見

日本語の“みる”といふ言葉

さて、日本語は、対人関係を表す言葉は実に豊富にあり、非常に微妙な使ひ方をしてゐるのであるが、動作や状態や性質などを表す“動詞”や“形容詞”では、総じて大まかな表現の言葉が多い。といふのは、外国語に比べると、抽象度の非常に高い言葉が多く、従つて語彙数が意外に少ないからである。

例へば、目の働きを表した言葉には、僅かに“みる”といふ言葉が一つあるだけである。これを、英語や中国語などに比べてみるとよく判ると思ふ。英語には、“see, look, glance, inspect, observe”などの言葉があり、漢字には、「見、看、瞥、視、察、観、覽」などの文字がある。

これらの言葉や漢字を日本語に翻訳する時には、「“ちらっと”見る」とか、「“丁寧に”見る」とか、「“気を付けて”見る」とかといふやうに、“見る”の上に修飾語を着けて、二つ以上の言葉にしてこれを表さなければならぬ。

英語でも漢字でも、「どのやうな態度で見るのか」、その見方が極めて具体的に表されてゐるのに対して、日本語は極めて抽象的な言葉が多く、これに修飾語を付け加へることにより、具体的な表現をするのである。

第二章 日本の言葉

そのいづれが勝れてゐるかと言ふと、それは一概には言ふことが出来ない。ただ、耳に聞く場合には、日本語の方が概して受取り易いと言へるのではないか。その反対に、見直しの出来る文字の場合には、一語で表現できる英語や漢字の方が、目に入れ易いといふことが出来るのではないかと思ふ。

だから、日本語には“みる”が一語しかないけれども、漢字を使って表現してゐるのだから、日本語の“みる”に最も近い“見”を使ふのは結構なことであるが、それだけでなく、折角“看”“視”“観”“覽”といふ漢字もあるのであるから、“看る”“視る”……といふやうな表記をすれば、修飾語を使はなくても、豊かな表現が出来ると思ふ。

戦後、表記の簡易化だけが尊ばれて、“漢字の音訓整理”が行はれ、“みる”はすべて“見る”と表記することにさせられてしまつたが、これは明らかに“文化の逆行”だと私は思つてゐる。

“視察”“看護”“観覧”などの言葉は実生活の中で使つてゐるのだから、「どのやうな見方をするか」に依つて、“看る”“視る”“観る”といふ使ひ方をすべきだと思ふ。それが特に困難である訳がない。また、困難だから避けるといふのでは何とも情けない話である。

日本語の再発見

そもそも日本語においては、“みる”といふ言葉は、目を使ふことばかりを意味したものではない。「味を“みる”」とか、「病気を“みる”」とか、目以外の器官を使ふ場合にも“みる”と言ふのである。

“^{しやうみ}嘗味”といふ言葉がある。これは「味を“みる”」といふ意味の言葉だが、“嘗”といふ字は、“尚”と“旨”とを組合せて作った字であって、“旨”は、食べ物が口に入つてゐる形を表した字で、わが国では“^{うま}旨い”と訓んでゐる字である。それで、私は、「味を“みる”」は、「味を“嘗る”」といふやうに書いたらよいと思ふ。

「病気を“みる”」は、家族が^{かん}看病する場合の“みる”だったら、「病気を“^{かん}看る”」と書いた方が解り易いと思ふ。然し、医者^{しん}が診察する場合の“みる”だったら、「病気を“^{しん}診る”」と書いた方がよいと思ふ。

このやうに、「日本語の“みる”を、漢字ではどう書いたら良いだらうか」といふやうに考へて漢字を使ふならば、日本語の“みる”といふ言葉の働きがどんなに広いものであるかがよく解り、かつ、物の見方や考へ方が深まるのではないか、と思つてゐる。

“見”といふ字は、“目”と、“^{ひとあし}儿(人脚といふ名があるが、元は“儿”で、人が坐つてゐる形を表したもので、“人”を意味する漢字の部品)”とを組合せて作った字で、「^{ひと}人における^め目の働き」である“見る”ことを表した

第二章 日本の言葉

字である。だから、目を開いてみれば自然に見えて来る場合の“見る”ことを表した字である。

“看”といふ字は、“^て手”といふ字の変形したもの”と“目”とを組合せて作った字であるから、“見”のやうに「単なる目の働きとしての“見る”」と異り、「手の働きが加はつた“見る”」である。だから、「病人を“みる”」にはこの“看る”がふさはしい。

ところが、戦後の国語政策は“音訓整理”と称して、かういふ表記を禁じてしまった。敗戦のショックで正常な思考が働かなくなつたためであらうか。ともあれ、音訓整理は、自分で自分の頭の働きを制限したものであるから、この政策で日本人の思考が貧弱になつたことは確かである。といふのは、次のやうな話をある幼稚園長から聞いた。

新任の若い先生に、「ちょっとの間、子供たちを^み見てみてね」と言つて、幼児たちの面倒を^み見るやうに指示して置いて、しばらくして帰つてみると、幼児たちはそれぞれ勝手な事をしてゐて大騒ぎ。ところが、この先生は全く手を^{まか}拱いてただ“見てゐる”だけだったのである。

園長がそれを^{とが}咎めたところ、その先生、「はい、先生の指示通り、ちゃんと“見て”ゐました」と、堂々と答へたといふのである。この先生は、明らかに“みる”とは“見る”だけで、“看る”といふ言葉は知らなかつたのである。

日本語の再発見

確かに、“みる”といふ言葉を“見る”とだけ一律に表記させてゐる今の教育では、“みる”といふ言葉には、看病の“看る”や、診察の“診る”や、嘗味の“嘗る”や、観察の“観る”や、視察の“視る”など、いろいろの“みる”がある、といふことへの理解は難しいだらうと思ふ。

いろいろの表記に蝕れてゐさへすれば、自然といろいろの“みる”が解るであらうが、戦後はそれが無くなってしまったのだから、今の若い先生の頭が貧困になってしまっても先生を咎めるわけには行かない。一刻も早く国語を建て直すことである。